



体験を価値づける

子どもたちとワークショップをする中で感じたことを発信したいと始めたこの連載も、早いもので5年目となります。今シリーズではワークショップの中でよく受ける質問について、僕がどのように考えているかお答えします。



考えるって
おもしろいかも!?

秘められた価値を 発見する

ファシリテーターの大切な役割として、学習者の体験や言動を価値づけることがあります。学習者がこぼした言葉や、無意識でとった行動をキャッチし、それはこんなところに繋がるよね、こんな意味があるよねと新しいフレームで捉え直すことで、学習者は自分がしたことの新たな側面に気づけるようになります。

先日、小学校で出前授業をしていた時のこと。GEMSの「沈む? それとも浮く?」というアクティビティを応用して、砂浜に落ちているさまざまな海ごみが水の上と底のどちらを通って流れていったのかを調べる実験をやっていたところ、一人の女の子が次々に自分の持ち物を水槽に入れて「実験」をしていました。しかし、どんなものが浮くと思っ
う? などと聞いても、「わたし考えるの嫌い」と考えることを拒んで、水遊びのように定規、鉛筆、下敷き...と水槽に放り込んでいます。ただ、ここで深

追いしても彼女が苦しくなるだけなので、僕はあえてその場はそっと見守るだけにして機会を伺いました。



”自信” 学びを促進する

クラス全体で結果を共有する時間になった時、他のグループの子たちから「軽いプラスチックは浮く」「重さだけじゃなくて、平たいプラスチックが浮くんだよ」「薄さも関係あるんじゃない?」といった声が上がりました。そこで僕は、「総合すると、軽くて、平たく

で、薄いプラスチックは浮くっていうこと? さっきも下敷きが浮いていたもんね」と、女の子に話を振りました。女の子は「えっ、わたし!」と驚いたものの、周りの子たちが興味津々に彼女を見ているのに気づき、「うん、下敷きが浮いたから、みんなが言っていることは合ってると思う」と続けたのです。

そこから彼女の様子がガラッと変わり、グループの話し合いでも積極的に発言するようになっていきました。自分がなんとなくやっていた「実験」が、実はクラスにとって価値のあるものだと感じられたことで、自分も考えることができると自信になったのかもしれない。

学習者が何気なくやっていたことの中に秘められた価値を発見することは、学習者の視点や思考を拡げつつ、学びに対するモチベーションを高めることにつながるのであります。

鴨川 光

(かもがわ ひかる)

1987年茨城県生まれ。ジャパンGEMSセンター主任研究員。早稲田大学大学院教育学研究科修了後、2013年6月より現職。子どもの思考力や社会性の発達について研究している。ワークショップやボランティアを通して子どもたちと一緒に成長中。

